



香水・茶色

有村 春男

△香水▽

うちのママが、香水を、買ってきてくれました。

「夏のために……」
「夏になりませうからね。」「パパは、夏、このほか臭いすからねッ。」
わかってります。

生来、カン性である。「汗性」か。
夏になると、テメエの、はいてた靴下が、夕方には、テメエで、がまんなりか

でいるのです。
さきごろ熊本舞協会で阿蘇の波野に出かけ、たくさんのわらびをつんだのに味をいめて、五月なかば過ぎ、高千穂のおけい古の帰途、いつもの道をかえて三ヶ所を越え、五ヶ瀬に出、馬見原、矢部御船を通りて帰ることにしました。途中車を降りて、文字通りの道草を食おうという寸法なのです。

山また山の路は、切り立てたような急坂で路の片側には、伸びたせんまいやわらびの葉がいちめん顔を出して風によいでいます。杉林の中には、まだやわらかなわらびがたっているそうですけど、もう何としてもおそいで、山路（やまふき）をとることにしました。

根っこ赤くてやわらかなふきを、両手にあまるほど取ったあとは、あざみや名も知らぬ野の花を摘んで、持参のお茶菓子をつまんだりしていつとき過ぎ、津花峠を越せば路はようやく下り坂になって、煙らしいものが見えてきました。路を曲ると右手のはるか下の方に五ヶ瀬川の流が見え、水量は少ないのに、岩をかむ早い流れが白しぶきをあげています。私は、この五ヶ瀬川のもっと上流で育ち、この川であらめを釣ったり、水を浴びたりしたものでした。

ちょうど茶摘時で、山の中腹に麦わら帽子をかぶった人たちがお茶を摘んでいます。このあたりのお茶は、実においしくて、三ヶ所茶として独特の風味を好まれています。

馬見原では、お茶、椎茸の卸屋さんらしい古いお店にはいりこんで、みごとなせんまいをわけてもらい、八百屋で芋こ

ねるほど、臭くて臭くてたまらない。帰り早々に、靴下、下着、ポイツと、風呂場の流しに投げこみ、足の小指の裏までも、スポンジで、ゴシゴシ洗ってからでない、ほんだんです。
二十年、連れ添った女房どのゆえ、だんなの汗臭さ、体臭のほどは、よくご存知。人様に、お会いするのが商売の、だいな、大事な、だんなさま。
人様に不愉快な思いを、させないよう、に、という、まこと、貞女の鏡。
ありがたき、この、ご配慮よ。
六月、今年も、また、香水を買ってきてくれました。ぼくのために……。

× 「汗ばむ季節になったなあ」
× 移りゆく年、月、カミさんの親切をしみじみと、肌を感じつつ……、優雅な思いに、うっとりしかかったた、とたん、

台所から、ママの音が、すっ飛んできました。
「パパッ、夏のポーナス、何日でしたッけ」
なんちゅうことですか。

近づいた、ポーナス、お目当ての、サーピス、だった訳けでしたヨ。
せっかく、パパは、「汗かきの亭主持つと、ずいぶん、余計に、気も、ゼニも使わせるもんだなあ」と、嬉しく、涙あふるる心境でしたのに……。

△色▽

色気の色ではありません。
県庁舎の外装の色のお話です。

△茶色▽

私のもの、では、ない建物。
× 『八カ月ほどかかりましたろうか』
と、松下さんの、お話だった。

目下、当方で建築中の、支局と、社宅の外回りに、タイルを張る段になって、「ハタ」とゆき詰まった。

× 工事監督さんが、「これだけは、建て主さんの好み次第。そちらで決めて下さい。」と、そっけなかった。

× 色気の色なら自信がある。ガキのときから、つい先だってまで、「国際的」に競ってきた、ぼくだ。
だが、四十数年来、建物の「茶香」に迷った経緯はない。
「ハタ」と困って、見て歩いた。

× 熊本市内中、何日もかかって、見て歩いた。そんなとき、何日目かだった。県庁前の大通りに立って、

× 「パタッ」とあの「茶香」に魅せられたなんとも、見て、見あきぬ、あの、深い、「茶の色」

× 「よし」これにしよう。これにきめよう。すっかく、茶色にほれた。
この「茶色」一色で、全部、いこう、と即座にきめた。

× きめてから、この色を『熊本の色』と決めた、当時の、松下県庁舎建設室長に「その由来」を、ききにいった。

× 寺本知事さんを頂点とし、このことにならずわった人々に、長く、深い、思慮と、英知があった。

× あ、県庁舎の「茶色」を決定するまでには……。
『八カ月ほどかかりましたろうか』
と、松下さんの、お話だった。

× 八人の子には八枚の夏衣がいる
蟬はあちらで鳴かしてくれよ 傳松
この代表作といわれる歌においても、この種の恥らいはあった。

× 酒無しにけふは暮るるか二階より
あふげば空を行く鳥あり 牧水
酔ひて妻に帰る野中の一本道、ゆらりふらりと笑ます月かな 傳松
この二人にとって、酒の無いことは、死にも勝る苦しみであったと思われる。これを、
朝酒はやめむ屋ざけせんもなし
ゆふがたばかり少し飲ましめ
と牧水は恋々の情を示し、傳松は
一合の焼酎買へぬ夜は夜で
書物が頭に入るといふものぞ
と、あきらかな強がりを行っている。

× 「野鍛冶抄」の後記に「私などは要するに愚鈍な田舎者にすぎぬのだから、齢五十になって漸く文学というものの本質が解りかけて来たのである。父と母とは早かったが私の家系は一たいに長生きの方だから酒の無茶呑みを用心すれば私も長生き出来るかもしれない、尤もその『酒の謹み』は保証出来ぬような性格に生れついている」と言っていたが、その晩年は酒でなく、幾分の精神のみだれもあり脳軟化症にて逝いたのは、彼にとつて悲しむべき、はた笑うべきことであつたらうか。しかし行年六十七歳を思えば、これとて陰れた夫人の忍耐と、八人の子の成人した姿を見ても思はずべきことではなかつたと思われる。

× 吾が語調や媚びをる如し 傳松
に見る、この気遣いは何であらう。

× 一銭も無き日を妻が明るきに
ひとつの隠れ蓑にすぎない。
人は傳松を、豪放磊落と言う。これも

× 己を埋没したい一つの隠れ蓑の役目をも
していかも出来ない。
己を埋没したい一つの隠れ蓑の役目をも

× あるテレクささというもののなかに、自
己を埋没したい一つの隠れ蓑の役目をも

× 己を埋没したい一つの隠れ蓑の役目をも
していかも出来ない。
己を埋没したい一つの隠れ蓑の役目をも

× 己を埋没したい一つの隠れ蓑の役目をも
していかも出来ない。
己を埋没したい一つの隠れ蓑の役目をも

× 己を埋没したい一つの隠れ蓑の役目をも
していかも出来ない。
己を埋没したい一つの隠れ蓑の役目をも

× 己を埋没したい一つの隠れ蓑の役目をも
していかも出来ない。
己を埋没したい一つの隠れ蓑の役目をも

の県庁舎。
重厚、豪華な、その見映え。
落ち着いた、それでいて、明かる、いつまでたっても、見あきのしない、火の国の色、県民から、身近かに、親しまれるあの「茶色」森と水の調和の妙。
× 夏になると、必ず、香水買ってきてくれる、ぼくにとつて、一番、身近かな、うちのカミさんの「色」も、あの、「茶色」なのか。
× (時事通信社熊本支局長)

ふき・わらび

ぜんまい

藤間 勘太女

身体を使う仕事をしているということもあって、食べることは上手で、何でもおいしくいただくのに、バターや卵、肉を使う料理は、食べるのとはかき作ることは苦手で、一切若い者まかせ、たまに自分で何か作ろうとすれば、きまっ木芽のつくだ煮や、ふき、ぜんまいのお煮しめになります。だから、山のものの料理となると、私でなければならぬように、それこそ自他ともに思い、またそうした山菜料理を人さまにもすすめ、おいしいと言われると悦にいつております。いつか私もふだんの暮らしの中では、母と同じようなことをして楽しんで

八人の子には八枚の夏衣がいる
蟬はあちらで鳴かしてくれよ 傳松
この代表作といわれる歌においても、この種の恥らいはあった。

× 酒無しにけふは暮るるか二階より
あふげば空を行く鳥あり 牧水
酔ひて妻に帰る野中の一本道、ゆらりふらりと笑ます月かな 傳松
この二人にとって、酒の無いことは、死にも勝る苦しみであったと思われる。これを、
朝酒はやめむ屋ざけせんもなし
ゆふがたばかり少し飲ましめ
と牧水は恋々の情を示し、傳松は
一合の焼酎買へぬ夜は夜で
書物が頭に入るといふものぞ
と、あきらかな強がりを行っている。

× 「野鍛冶抄」の後記に「私などは要するに愚鈍な田舎者にすぎぬのだから、齢五十になって漸く文学というものの本質が解りかけて来たのである。父と母とは早かったが私の家系は一たいに長生きの方だから酒の無茶呑みを用心すれば私も長生き出来るかもしれない、尤もその『酒の謹み』は保証出来ぬような性格に生れついている」と言っていたが、その晩年は酒でなく、幾分の精神のみだれもあり脳軟化症にて逝いたのは、彼にとつて悲しむべき、はた笑うべきことであつたらうか。しかし行年六十七歳を思えば、これとて陰れた夫人の忍耐と、八人の子の成人した姿を見ても思はずべきことではなかつたと思われる。

× 吾が語調や媚びをる如し 傳松
に見る、この気遣いは何であらう。

× 一銭も無き日を妻が明るきに
ひとつの隠れ蓑にすぎない。
人は傳松を、豪放磊落と言う。これも

× 己を埋没したい一つの隠れ蓑の役目をも
していかも出来ない。
己を埋没したい一つの隠れ蓑の役目をも

× 己を埋没したい一つの隠れ蓑の役目をも
していかも出来ない。
己を埋没したい一つの隠れ蓑の役目をも

× 己を埋没したい一つの隠れ蓑の役目をも
していかも出来ない。
己を埋没したい一つの隠れ蓑の役目をも

× 己を埋没したい一つの隠れ蓑の役目をも
していかも出来ない。
己を埋没したい一つの隠れ蓑の役目をも

× 己を埋没したい一つの隠れ蓑の役目をも
していかも出来ない。
己を埋没したい一つの隠れ蓑の役目をも